

残心

研修委員会 平野潔

我が国の福祉制度は、増大化・多様化するニーズに対し逼迫し続ける財政状況からの脱却を図り、国民に一部負担を課す『痛み分け』のサービスを礎としています。ナショナル・ミニマムの原則すら浸食しようとするこの制度は、当事者ニードの優先順位を測るためにアセスメントを課す。またサービス提供者に対しても、自立という名の下、『なるべく税金を使うことのない』当事者にすることを目標と定め、評価をするものです。

その中で手段として使われるソーシャルワークを生業としている我々作業所職員は、何者なのでしょうか。そして何処に立つべきなのでしょう。我々は時折、そのことを振り返り、思索する必要があるように思います。

人間関係は本来相互的なものであり、援助を通じて我々は彼らから何かを得ています。福祉の地平を開拓してきた先人たちの手記からは、それらが『得難い糧』として生き生きと語られ、我々はその醍醐味に魅せられてこの世界に分け入ったはずです。近年、その魅力を伝える情報は少なく、労働としてのケアの負担感ばかりが強調されている気がします。

我々が『専門職』化するほどに、ソーシャルワークの手法によって、支援者が障害当事者に対して、病や障害そのものを見たり、社

会との関係接点を評価したりすることで、支援者と当事者との間に生まれる、豊かな関係性を断ち切ってしまったのではないのでしょうか。

このことを哲学者のマルティン・ブーバーは『我と汝の関係』ではなく、『我とその関係』と呼び区別しています。

我々はこれらを実践の中で葛藤として抱えています。計画化、分業専門化、マニュアル化されたサービスの中で、人が生きる、生きようとする行為を支えることが出来るのだろうか、支えるための関係を構築することが可能なのだろうか…。

阿部先生の珠玉の「ことば」は、多くの示唆を下さいました。そして時間が経過する中で、僕の中でこのようにまとまりを持つようになりました。

「あなたはその実践の一挙一動に、魂を込めていますか？」

当事者と対峙するその瞬間瞬間が、自分の人生をかけるに値するワークだということ。そして相手の立場に立つこと、併せて大局を見ること、感性を磨くということ。良いか悪いかよりも、その時その時主体的な決断をしたかどうか、ということなど…。

歴史の不幸や、制度の不備を嘆くことは簡単です。しかし自分の仕事に誇りを持ち、今日～今～この瞬間～に、この『福祉』という職域に従事するという我々の実践の積み重ねが、制度を作り、歴史をつくり、未来を創るものだ。そんな風に、叱咤激励された気がす

るのです。

実践報告には大変勇気づけられました。どっこい、作業所魂はしつかりと世代間を引き継がれ、健在ではありませんか。現場で夢中で利用者と対峙する姿が生き生きと語られ、聴衆の目もまた輝きだすような、そんな素晴らしい時間を過ごすことができました。

感動のまま、この日仲間と飲んだ酒の旨かったこと。

阿部先生の本に『残心』という言葉が用いられています。

そこから少し引用させてもらいましょう。

『「残心」という言葉が茶道にはある。客の帰ったあとの主人の気持ちを物語るように主人の心に残った安堵感・喜び・満たされた気持ちるを言うらしい。

介護福祉士（作業所専門職）の働く喜びは、介護する高齢者や障害者が少しでも自ら生きる態度を示すことなのではないか。肉体的にできなければ、精神においての自立を目指して働きかけることがどんなにすばらしいことか。

日々の仕事の営みのあとに魂と魂がふれあう出会いが生み出す

『「残心」の豊かさを宿しながら、最善を求めて努力したいと思う。』

（阿部志郎著『福祉の哲学』 おわりに…カッコ内は平野加筆）

自らのうちに「残心」が豊かに残るようなケアをめざしたいものです。

